

so long

おやまん

「どっかにいい男転がってないかなあ？お金があつてえ、見た目もよくてえ…」

いつき  
齋 はそう言うなり、私の隣に寝転がった。

ベッドの上の布団が”パフツ”と音を立て、ホコリが舞う。

「また、そんなこと言って。恋愛なんかに興味ないくせに。」

「美咲はいいよねえ。可愛いしさ。こう、なんて言うのかなあ。守ってあげたくなるんだよ。女のボクでもさ。」

齋はゴロゴロと私のベッドの上を転がっている。

私は紅茶を飲むために座り直して、机の上のクッキーをかじった。

「私は、齋の方が女の子っぽいと思うよ？クッキーもこんなにおいしく作れるし。」

「そうかなあ？でもお、だれも女の子扱いしてくれないのはさすがに悲しくなるよ？ボクだって年頃の乙女なのにさあ。」

齋はふくれてみせると、後ろからふいに、私に、抱きついてきた。

「それともお、女の子に奔っちゃおうかなあ？学年のアイドル、海野美咲をボクのものに…」

そのまま、私をベッドに押し倒そうとする。

「もう。そんなことばかりしてるから私にも彼氏できないんじゃない。誰がアイドルだって？」

そう言って齋をくすぐり倒す。

いつものパターンだ。

けれども、今日の齋は、何かが、違った。

「アイドルだよ、美咲は。」

いつもと違って正面から抱きつかれる。手に、心なしか力がこもって、いる…？

「美咲はすごく可愛いし守ってあげたいけど、みんな、自分じゃ役者不足だと思って尻込みしちゃうだけだよ。」

「齋？どしたの？急に。」

抱きついたときと同じようにふいに私から離れると、私の頬にキスをした。齋の変なくせだ。

「ボクなんか、まるっきり同性としか思われてないもん。」

去年、憧れてたセンパイにふざけて『ボクのことどう思ってますか？』って訊いたら、『可愛い弟』だって。

バカにしてるよねえ。妹ですらないんだもん。

だったら、いつそのこと奴らのアイドルを盗ってしまおうかと…。」

「バカなこと言わな…」

再び私を押し倒した齋は、まじめな顔で私を見つめた。

「美咲は、ボクが相手じゃいや？大切にするからあ…」

私は言葉に詰まって齋の顔をまじまじと見つめる。

齋はそのまま私を抱きしめる。

一瞬の沈黙のあと、齋が吹き出した。

「美咲、本気にしたの？もう、ノッてきてくれると思ったのに～。笑いこらえるの苦しかった～。」

「もう、ちゃんと前振りがないとだめだよ！無駄にドキドキしちゃったじゃない。」

齋が私を解放してくれたから、代わりに紅茶を入れてあげた。

「ありがと～。クチビルも奪っちゃおうかと思ったけど、美咲を怒らせるとこわいからなあ。」

「まったく、齋は悪ふざけが過ぎるよ。ファーストキスが女の子なんてシャレにもなんないって。」

そのまま、いつものように何時間かバカ話をして、齋は帰っていった。

部活の話、先生の悪口、うわさ話にテレビのこと。ふたりで話していると話題はつきないから、いつものことだった。

でも、今日の齋は、何か、違った気がした。

気のせい…だったのだろうか？

そういえば、誘うときに（彼女は、「私のうちでお茶をする」ことに、私を誘うのだ。）相談があるようなことをほのめかしていた気もする。

ま、明日にでも問いただせばいいか。

とりあえずは英語の予習をしないと。新谷ったら、必ず全員に当てるから…。

「美咲、おはよ～。昨日のスマスマ見た～？」

翌日、齋はいつもと変わらないようだった。

...昨日のは思いすごしだった？

齋が、元気ならそれでいっか。

私は齋の気まぐれだと思い、来たるべき新谷の英語に備えてノートの確認に集中した。

「海野さん、おはよう。予習はカンペキ？」

ふと顔を上げると林くんの笑顔があった。

「全っ然。林くんは？どこまでやってきた？」

はやしかずのり  
彼、林一徳くんは中学からの知り合いだ。

男子が苦手な私にとって、昔からの知り合いがクラスにいるのはありがたかった。

「きり一つ、礼、着席」

奇跡的に指名を逃れてホッとした私は、この後、もう一つ難関が残っていたことを忘れていた。

「今日のホームルームでは秋の体育祭の実行委員を決めるぞ。なりたいやついないか？」

担任の声に驚いて、周りを見渡す。

...案の定、誰も手をあげない。

私はすでにくじ引きに当たらないように祈り始めた。

「俺、やります。」

手をあげたのは林くんだった。

彼に触発されたのか女子もさっさと決まったので、私は機嫌良く部室に向かった。

階段を上がったところで齋と一緒にになった。

「美咲もホームルーム終わったの？実行委員、誰になった～??」

「林くんと、宮野さん。齋のどこは？」

「ボクと、山川くん。」

「えっ？くじにはずれたの？」

「ううん、手えあげたんだよ。面白そうじゃん??」

「ふ～ん…。私は実行委員とかはダメだな。齋は向いてそうだけど。」

「良かった～。他のクラスの人も知ってる人で♪何の係しようかなあ？ふふ～ん♪」

そこで部室に着いたので、会話は終わってしまい、お互いに練習場所へ向かった。

私と齋は同じ吹奏楽部に所属している。私の楽器はクラリネット、齋はトランペット。

引っ込み思案な私に、最初に声をかけてくれたのが、齋だった。

齋はいつも明るくて、元気だ。

彼女のおかげで、お弁当を食べたり、買い物をする仲間にも困ったことがない。

4月に後輩ができてからも、齋の話に色んな人が出てくるおかげで名前を覚えるのに困らなかつた。

先輩や後輩に覚えてもらえたのも、齋がいたからだろう。

齋にそんなことを言っても、きっと

「美咲は美人だから、ボクがいなくてもすぐに覚えてもらえるよ♪」

と言って、私の頬にキスをするだろうけれど。

齋が実行委員をすることにしたと聞いたとき、私はなんだか寂しかった。

齋が新しい世界をつくって、私から離れていってしまいそうな気がしたのだ。

もちろん、気のせいだろうけど…。

気のせいだった証拠に、帰り道の齋はいつもと変わらなかつた。

駅までの道でも今日の出来事を話してくれたし、数学の秋山や英語の新谷の悪口も言い合った。

けれども、笑顔で別れてからも、私の心のもやもやは消えなかつた。

なにか、悪いこと、哀しいことが起きてしまうような気がして、仕方がなかつた。

そして、ふと、昨日の齋を思い出した。

いつもよりも、女の子扱いされないことを気に病んでいたようだった齋。

誰か、好きな人でも出来たのだろうか？

そう考えて、私はひとり首を振った。

だったら、真っ先に私に言っているはずだ、と。

去年、憧れの先輩に彼女ができたときも一緒に話したではないか。「祝福しよう」と抱き合って…。

「気のせいだ」と思うことにした。

少なくとも、齋から何かを聞くまでは。

そして、いつも通りの数日間が過ぎた。

実行委員会の仕事が始まっても齋の態度が変わったところはなく、私はそっと胸をなで下ろしたものだ。

体育祭の実行委員会には、実行委員長をはじめとして副実行委員長・書記・総務などの係があるらしい。

齋はその中から、飾り付けの責任者である装飾係を選んだそう。

ちなみに、林くんは実行委員長に祭り上げられてしまったらしい。

齋の仕事は早めに始めなければならないものらしく、私の所に遊びに来るついでに林くんとなにやら相談をすることが多くなった。

得点掲示板やら入退場門などのデザインを一人で手がけると言っ、齋は嬉しそうだった。

うちの高校は一応は進学校ということになっているので、行事や部活動は盛んでも、実技教科の授業は少ない。

週に一度ずつしかないうえに、音楽と書道と美術のどれかひとつしか選択できない。

私は音楽だが、齋は吹奏楽部員には珍しく美術選択者だった。

美術は提出物も多いので敬遠されるが、齋はいつも楽しそうに課題をこなしていた。

仕事の都合上、部活にも来られずに美術室に入り浸っている齋を見ていて、ふと、そんなことを思い出した。

『体育祭まであと100日』の掲示（もちろん、齋が作ったものだ）が出た頃になると、校内が浮き足立ち始めた。

齋はもちろん忙しそうだった。

毎日凝った日めくりを校門に貼り出し、私のクラスに来るのも実行委員たちとの話し合いのため、ということが多くなった。

各クラスでも垂れ幕なんかを作るので、そのチェックも齋の仕事なのだった。

そんなこんなで、私は齋とゆっくり話すこともできず、一緒に帰ることもできず、ふてくされていたのだった。

が、ある土曜日の夜に齋から電話があった。

「明日、久しぶりに美咲んちに行っていていい？久々に休みが取れたから♪お互い、積もる話もあるし〜。」

「もちろん、いいよ。私、もうヒマでヒマで。」

そして、久々の電話は、齋がうつらうつらして携帯を落とすまで続いたのだった。

翌日の日曜日、齋は来るなり私に抱きついた。

「美咲だ〜♪な〜んか、もう何年も会ってないみたいだ〜♪」

「何言ってるの。毎日のように人のクラスに来てくせして。」

「だって、美咲と話すヒマなかったんだも〜ん。学校じゃ頬ずりもキスもできないしさ〜。」

齋は部屋に入るなり私をベッドの上に押し倒した。

「美咲のほっぺ、スベスベで気持ちいい〜♪」

そして、キスの嵐だ。

いくら齋がキス魔でも、こんなのは初めてだった。

久々に休みが取れてテンションがあがってるにしても、これはおかしい。

「齋、どしたの？今日変じゃない？」

「変じゃないよ〜だ。美咲に会えなかったから寂しかったんだも〜ん。」

齋はそう言って私を放そうとしないけど、これじゃ顔も見えやしない。

「絶対、変だよ。何かあったんでしょ？委員会でドジ踏んだの？」

と言いながらすぐると、齋は涙を流しながら降参した。

齋が荒い息を整えている間に、私は麦茶を持ってきてあげた。

もう温かい紅茶という季節でもないだろう。

「ドジなんか踏んでませんよ〜だ。仕事は順調ですう。」

一口麦茶を飲んで、やっと齋が反論する。

「なら、いいんだけど。でも、何かあったんでしょ？またオトコノコ扱いされたとか...。」

そういえば、この前は珍しくスカートを履いてきていたっけ。

齋は学校でも外でも私服で、パンツばかり履いてくるのだ。面倒くさがりな私は制服の方が多いのだけど。

「そんなことないも〜ん。仕事では男も女もないしい。それより〜、ちょっと、思ってることがあるんだけどお・・・」

「なに？そんな遠回しな言い方しないでよ。」 齋が心なしかニヤニヤしているので、私の声はなぜか尖った調子になった。

「あのさ〜、林くんのこと、どう思う??」

「林くんって、うちのクラスなの？」

「もち。ねえ、どう思うよお？」

そう言って、齋は私の頬をつねりだす。

「どうって、クラスメイトよ？友達ってには言えるかもしれないけど。」

「ともだちい？そっかあ、林くんも可哀想になあ。この鈍感クイーンが相手じゃなあ。」

私には何の話だかまったくわからない。

齋は相変わらずニヤニヤしている。

「何？言いたいことはハッキリ言ってよ。」

私はそっぽを向いてみせた。齋にはこれが効果てきめんなのだ。

「ゴメンゴメン。怒らないでよお。」

齋が手を合わせる。

「で、なんの話？」

「ボクの見たとこでは〜、っていうか、3組ではもっばらの噂なんだけど〜」

3組は私のクラスだ。齋は5組。

「噂？」

「うん。林くんは、美咲のことが好きなんじゃないか〜って。美咲もまんざらじゃないんじゃないか、なあんて。」

そう言って、齋は、麦茶を一息に飲み干した。



「山川くんとか、へこんでたよお？」

「あゝ あ〜もうっ！！」

ボクの声は無人に近い学校に響いた。さすがに慌てて手で口を覆う（笑）。

ユウツだったテストも終わって（ありがたくないことにすべて返ってきたけど）今週からは嬉しい夏休み♪のはずだったのに。

美咲はこの前の一件で怒っちゃってるしさ。

「そんなこと言うなんて、林さんに失礼でしょ？齋まで噂なんてものを信じてるとは思わなかった！」

だ〜って。

変なところでおカタいんだよね、美咲って。

恋愛に興味ないのかねえ、あんなにモテるのにさ。

というわけで？ボクは夏休みに独り学校で仕事です。

入退場門のロゴやら、忙しくなる夏休み後の日めくりやら。

何を使おうかって素材を並べて、ああでもないこうでもないって連日独りで悩んでるワケ。

段ボールに色つけたのを貼ってもいいし、スプレーで色を入れてもいいし…。

段ボールにしても画用紙で色つけるか、色塗るか…。

素材は学校の余り物でお金もかからないし、ミニチュア作ってるだけだから楽しいんだけど。独りでは寂しいよなあ。

美咲の機嫌が直っても、驚かせたいから見せたくないしなあ。

あの<sup>こ</sup>娘のきれいな服汚したくないし、力仕事もさせたくないし。

いくつか候補はできてきたんだけどな〜。

誰か実行委員で…

ま、いいや。

週末の実行委員会で議題のすみっこにでも入れてもらおうと。

それまでに、このミニチュアたちを完成させてしまおっと！入退場門の分だけでも。

その日の夕方、ボクは林さんに電話をした。

「もしもし、林くん？実行委員の立花だけど…」

「ああ、はいはい。どうかした？」

「たいしたことじゃないんだけど、入退場門とかのデザインが決まなくてさ。

ミニチュア作ったから今度の委員会で見てもらおうかと思って。」

「ミニチュア？そんなの、いつ作ってたんだ？」

「ここ2、3日…かな？今日なんか昼過ぎに煮詰まっちゃって、学校なのに叫んじゃった。」

「独り、学校で？海野さんとか一緒じゃなかったんだ？」

「美咲はちょっと機嫌悪くて…。ま、あとで驚かせたいし。」

「へえ、海野さんにも機嫌悪いときなんてあるんだ(笑)。…仕事、明日もやるのか？」

「うん。まだ入退場門の分ができてるだけだし。なんだかんだ言っても楽しいし。」

「手伝おうか？俺に出来ることがあれば、だけど。」

「ありがと！独りだと煮詰まりやすいし、ヒトの意見も聞きたかったんだ。ヒマなの？」

「うちの部は幸いというか、弱小だから総体も終わってるので。吹奏樂のがコンクールで忙しいんじゃないっけ？」

「美咲たちは、ね。ボクはコンクールメンバーじゃないから。基礎練して、一年生の面倒を見て、終わり。」

「へえ。仕事は何時頃から？どこで？」

「部活が終わってからだから、3時すぎから。美術室借りてるんだ。」

「なら、そのころに行くよ。何か必要なものとかは？」

「汚れてもいいカッコしてきてくれれば、あとは学校の備品で出来るから。」

「オッケ。じゃ、また明日。」

「うん。ありがと。」

なんだか悪いことしたかなあ？手伝わせちゃうことになっちゃったし。

あ、ついでに美咲とのことを問いつめちゃおうっと♪

怒らせるといけないから、ひと段落した頃に♪

美咲にも電話しなきゃ。

悪いのはボク…だと思ふし。

仕事するのにもこのままじゃ気分がノッてこないし。

次の日、なんだかつまんない部活を終えて美術室へ行くと、林くんがいた。

「待たせちゃった？手伝わせるっていうのに、ゴメン。」

「いや、さっき来たばっかだし。立花は部活してたんだから、気にすんなよ。」

私服の林くんは（彼はいつも制服を着くずしている）なんだか、小さい頃に近所にいたおにいちゃんみたいだった。

「ありがとう」

「で、俺は何をすればいいわけ？」

「う〜んとね、とりあえず、コレ、見てもらえる？昨日作ったんだけど、どう？」

美術準備室から段ボールに入ったミニチュアたちを持ってきて、床にばらまいた。

「これ、全部一人で作ったんだ？すげえ。」

「時間があれば誰でも出来るよ♪でね、どれがいいと思う？」

「俺はこれが好きだな。でも、こっちも...。」

二人してなんだかんだ言い合いながら（時には脱線したりして）3つくらいに候補を絞って、今日の作業に取りかかることにした。

「えっと、入退場門はできたから...。次は得点掲示板かな？」

「まさか、これもミニチュアから作る、とか？」

「すぐにミニチュアは作れないよ。まずは下絵を描くの。」

「そっか。」

「実は、部活の休み時間とかに下絵は描いてきたんだけどね。」

「おおっ（笑）。」

「まず、土台を四角にするか、丸くするか...。四角くするとこんな感じで、丸くするとこんなのかこんなになるかな？」

二人で落書き帳をのぞき込みながら相談する。

だいたい決まったらミニチュアを作っていく。

林くんは器用に段ボールを切っていく（ボクなら倍以上の時間がかかりそう）。

3つくらい出来たところでタイムオーバー。

林くんはなんだか楽しかったらしく、

「明日も同じ時間に来ればいいか？ なんだか小学生に戻ったみたいだな。」

と笑って帰っていった。

そんな風にして作業は数日間続いた（とはいっても、まだまだ終わりそうにない）。

林くんはボクのリアクションが大げさだと言って、時々笑う。

それでボクがふくれると、もっと笑う。

なんだか子供扱いされてるみたいだ。

ミニチュアが全部完成して、二人で美術室の床に寝転がっているときに、ふと思いついて、訊いてみた。

「林くんってさ、美咲のことは『海野さん』って呼ぶのにボクのことは『立花』って呼ぶよね？」

「そう言われれば...、そうかも」

「男子はみんなそうだけどさ。ほら、美咲は見るからに『女の子』って感じじゃん？」

「まあな。あれで男だったらイヤだし。...なんか、すっげーエグい想像しちまった気分。」

林くんはそう言って、笑った。

しばらくして、林くんがぼつりと言った。

「立花は、話しやすいから呼び捨てになるんじゃないか？」

ボクは、つい、いつも思ってることそのまま、言ってしまった。

「違うよ。『子供』か『ペット』にしか見られてないからだよ。」

「そんなことないって。立花は立花で十分に女の子だと思うよ。」

「そうかなあ？」

林くんの優しさが嬉しかった。

でも、その言葉を、そのまま、信じることは、できなかった。

なんだか、いろいろと考え込んで帰るのにいつもの倍以上の時間をかかっちゃった。

だから、家に着いたときにはクタクタだった。

林くんの言ってたこと、美咲のこと...

おふろの中でも、ボクは考え続けてた。  
仕事以外のことでこんなにずっと考え事をするのはとても珍しいことで、だから、なんだか自分が変な気がしたけど。

林くんが美咲のことを好きなのは、確定でしょ？  
美咲が林くんのことを好きなのは...わかんないけど  
だから、今日のあれは、やっぱり社交辞令、というか慰め、だろうなあ。  
林くん、優しいからなあ。  
ボクがヘコんでたのを見て、励ましてくれたんだよね、きっと。  
明日からボクが変な態度をとったら、きっと困るんだろうなあ。  
うん。  
今日のは励ましてくれたってことなんだよ。  
ボクは美咲と仲いいしね。

あ、美咲のこと好きか問いつめるの忘れてたあ！！  
林くんが急に变なこと言い出すからだよ、まったく。

明日はもう仕事ないし・・・  
美咲のどこにでも行こうかな？部活帰りに。  
美咲の練習が長引かなかつたら、だけど。

林くんに問いつめるのは次の委員会のあとでも遅くないだろうし、その前に美咲のホントの気持ちを知ってほしい。  
美咲の機嫌も直さなきゃだし。  
コンクール前にモヤモヤしたままじゃ、美咲もいい演奏が出来ないだろうし。  
クラの音って柔らかくて好きなんだよねえ。

そんなことをイロイロ考えてたらだいたいぶ茹だっちゃって（笑）、汗ダラダラになっちゃった。  
半身浴でベタベタになった身体を洗ってサッパリさせたときには、気分もなんだかサッパリしてた。

おかげで翌日の練習はすごく調子がよくて。  
ミニチュアが完成した開放感や達成感もあったろうけど。

先輩に、  
「人数の調整で齋を（コンクールに）出せないのが残念になっちゃうような音だね。」  
って誉められちゃった♪  
この感覚を忘れないように、丁寧に、基礎練習をしよう♪  
文化祭でも、演奏会でも、ずっとこの気持ちのいい音でいられるように。  
下手なペット（トランペット）の音は耳に痛くて、聴けたモノじゃないからなあ。

案の定、美咲は居残りでセクション練習があったから、それが終わるまで珍しく（苦笑）教本をさらうことにした。

美咲が音楽室に戻ってきたからお茶に誘った。  
まだ怒ってて、断られるかもしれないと思ったけど、美咲はいつものように笑顔で受けてくれた。

「部活後の作業はもういいの？まさか、もう全部できたわけではないでしょ？」

久しぶりに齋がお茶に『誘って』くれたのは嬉しいけど、そのせいで仕事が遅れたのでは大変だ。

「まだ終わったわけじゃないけど、次の委員会まではやることないんだ。だからさあ。」

と齋は言って、私に抱きついた。

最近じゃ道端だろうが、商店街だろうが、教室だろうがお構いなし、だ。

「美咲に話したいこと…もあったしい。」

「話したいこと？なに？」

「美咲の部屋に着いたら、ね。それまではヒ・ミ・ツ。」

「意地悪だね、齋は(笑)。」

それからは、いつものように他愛ない話をして、私の家に向かった。

でも、今から考えれば、齋は、だいぶハイテンションだったように思う。

久々にお茶ができるから、私も浮かれてて気がつかなかったけれども。

「で、話したいことって何？もうお預けはナシだよ？」

部屋についた途端、お茶も出さずに、私は切り出した。

「お茶のんでからあ。そと暑かったもおん。」

「じゃ、お茶いれたら飲む前に話すこと！いい？」

「はあ〜い。」

氷を入れた麦茶を持ってくると、齋は珍しく正座で待っていた。

よほど大切な話なのだろうと思うと、好奇心がうずく反面、何故だか少し不安になった。

「あのね、美咲。ちょっと前から、部活のあとの作業を林くんを手伝ってもらってたの、ね。」

「それは知ってたよ。二人とも声大きいから音楽室まで笑い声が響いてたときあったし。」

「マジ！？それはちょっと恥ずかしいかも。」

「齋の声が響いてるのはいつものことだって(笑)。で、今日の『話』はどうしたの？」

「ちゃんと、順番に話すから待ってよお。」

齋は、そう言って麦茶を一口飲んだ。だいぶ話しくいことらしい。

「でね、昨日やっとミニチュアが全部できたから、今日は作業がなかったんだよ。それで、

昨日の作業が終わったときにね、ついき、いつものグチを…言ってしまったんだよね。少しだけど、さ。」

「それで？林くんは？」

「『立花は立花で十分に女の子だと思うよ』って。」

「なんだ、良かったじゃん。なんかひどいことでも言われたのかと、ドキドキしちゃったよ。」

「うん…。そう、なんだけどね。それで、さ、前にも聞いたんだけどさ、真剣に、答えてほしい質問があっささ…。」

「なあに？」

齋があまりに話しくそうなので、私は珍しく猫なで声になった。

「怒らないで答えてくれる??」

「もちろん。齋がそんなに真面目に訊いてるのに、怒ったりしないよ。」

「ホント?じゃ、訊くけどさ。美咲はいま、好きな人いる?」

「好きな人?う〜ん、特にいないと思うよ。なんか、そういうのって現実的じゃないな。奥手なのか、子供なのか、わかんないけど。漫画とかテレビとかの中のものって感じ?」

「そおかあ〜。良かったあ〜。」

齋は、机の上に、べったりと倒れ込んだ。

「え?」

「あのね、前にも同じようなこと訊いたでしょ?あの時は美咲に怒られたけど。」

「うん。林くんの話のときでしょ?」

「そうそう。あの時はただの興味本位だったんだけどね。」

「でしょ?だから、怒ったんだよ。齋だってあんなふうにからかわれたら嫌でしょ?」

「うん、ごめん…。」

齋は、私を拝みながら言った。本当に反省しているようだったから、もう忘れてあげることにした。

「でね、ボクさ、林くんの、ことが、さあ…。」

そう言って、齋は紅い顔で俯いてしまった。

そして、私には、わかってしまった。

齋は、林くんの、ことが、好き、なんだ…。

私はなんだか悲しい気持ちになった。

…何故、だろう?…。



私が黙って考え込んでしまったので、齋は、変な顔をして、私の顔をのぞき込んできた。

「美咲い？どしたのお？」

「ん？あ…。齋の話の続きを考えてただけ。何だろうなって。」

「それで…、わかった、の？」

齋は照れ隠しのイタズラ顔を作って、私の顔を覗き込む。

私は、何故か、わからないけれど、更に、悲しく、苦しく、なってしまった。

でも、私は、言った。

ちゃんと、言えた。

「齋はさ、林くんのが、好き、なんだよね？そう、なんでしょ？」

「…う、うん…」

齋はそう言って、また、俯いてしまった。

齋の気持ちは…林くんに、ある…。

そのあとは、何を、話したのか、よく、覚えて、いない…。

齋はいつもよりも早い時間に帰っていった。

私がそうさせたのか、齋自身がそうしたかったのか…。

なぜ、齋の、気持ちを、聞いた、ときに、悲しく、なった、んだろう？

齋の気持ちを、聞いて、悲しくなるのは…？

例えば、林くんを好きな人は、ライバルが増えて、悲しむだろう。

でも、私は、林くんのことを好きなわけでは、ない。

いい友達だし、クラスメイトの中では仲の良い方だ。

けれども、『それだけ』だ。

逆に…齋を、好きな、人が、いた、ら…？

林くんの、ことを、好きな、人、より、も、悲しむ、だろ、う…。

そう、齋、の、気持ち、が、自分に、ないことを、知って、しまった、の、のだから…。

思い知らされて、しまったのだから…。

そう、なんだ。

私が、苦しかった、のは、悲しかった、のは。

その、せい...なんだ...

恋人、とか、そういう、話が、現実的なものに、思えなかったのも...

林くんと噂の話を齋にされて、嫌だったのも...

齋と一緒にいる時間が減って、面白くなかったのも...

なにか、心がもよもやしていたのも...

はじめて、齋に言えない秘密を持ってしまった...

なんだか頭がぼ~っとしたまま、コンクールの当日になってしまった...

合奏中も自分で気づいた事実に気をとられていたようだった。

先輩や先生たちにも心配をかけてしまったようだった...

齋もちろん、今日は作業を休んで手伝いと応援に来ていた。

みんなの荷物を持ったり、舞台上のセッティングを手伝ったり。

手伝いの人達が一日中忙しく働くのは、去年私もやったからよく分かっている。

本番前に齋とゆっくり話ができないので、というか、この前話を聞いてから齋とゆっくり話ができずにいたので、私はなんだか不安だった。

本番直前の舞台裏に、齋は、いた。

いつものように投げキッスをして「頑張ってね。」と言ってくれた。

齋が、そう言ってくれたから...今までのように見守ってくれたから...

私は大した失敗もなく、演奏を終えることが出来た。

しかし、演奏を終えて片づけをして...

ロビーに出た私を待っていたのは、林くんに寄り添う齋だった。

そうか、齋が休みだということは、林くんも、休みになるんだ…。

齋は、林くんに想いを告げたのだろうか？

林くんは、齋の想いに応えたのだろうか？

その時の私の頭の中にあったのは、ただ、そのことだけだった。

ライバル校の演奏も、自分たちの結果も、頭から消えていた…。

考えても無駄なことだ、といくら自分に言い聞かせても消えない…。

齋が、私に、恋愛感情を持つわけではないのだから…。

忘れた方がいいに決まっている…。

私はロビーの齋たちに気づかれぬようにホールに入った。

一人で、空いている端の方に席を取った。

結果発表まではどこに座っていても構わないことがありがたかった。

誰にも会わずに、自分の心と対話できるのがありがたかった。

その日のコンクールの結果発表は良く覚えていない。

例年と大して変わらない結果だったからかもしれない。

とりあえず、コンクールはその日で終わった…。

先輩たちが泣いていたような気がする。

同級生や後輩も泣いていたかもしれない。

でも、私は独りでさっさと家路についた。

家に帰っても、私は独りで考え続けていた。

私はどんな気持ちでいるのか。

私の気持ちをどうしたらいいのか。どうすべきなのか。

心の片隅ではわかっている。

でも、まだ、もう少し...現実を直視するまでの猶予が欲しい。

齋は、こんな私を心配してくれているだろうか？

それとも、林くんのことや近づく体育祭の準備に追われて、私のことなど...？

それでも、いい。でも、今は心配してくれていると思いたい...

残念だったなあ。なんであそこが東北大会で、うちが銀賞なんだろう??

やっぱり、納得がいかないよ～!

林くんにも力説（というか八つ当たり??）しちゃった。

あきれられちゃったかなあ?

でも、ダメモトで誘って良かったかも♪結構楽しんでくれてたみたいだし♪

けっこう、イイ線いってたりして～!?

いやあ、美咲が出てるから、楽しんで観てたのかもしれないけど、さ。

お昼を二人だけで食べちゃったりさ、電車に並んで乗っちゃったりさ、しちゃったからなあ。

できちゃったからなあ…。

美咲のお怒りも解けたし。いつも通りに演奏してたし。

…そういや、美咲、帰りはいなかったなあ。

楽器と一緒にトラックにでも乗ったかなあ?

…いや、クラは乗せる必要ないし…。

結果がショックだったのかもしれないなあ。

クラパートは熱が入ってたからなあ。

残念会かなんかかなあ?

うちのパートは文化祭までの先輩ばかりだから特に何もしないけど、クラはコンクールで引退の先輩が結構いるらしいし。

ま、明日にでも聞いてみようっと。

体育祭の作成物も全部完成したし～♪

…林くんとの作業も終わっちゃうのは淋しいけど、まだ委員会はあるし～。

これからもいろいろ誘っちゃってみようかな～！？なんちゃってえ♪

次の日、美咲はなんだか元気がなかった。

声をかけようか、とも思ったんだけど、授業と委員会と部活と…。

全部が終わったときには美咲は帰ってしまったみたいだった。

林くんの話、相談しようかな？とも思ったのになあ。残念無念。

まさか、具合悪かったりはしないよね…。

電話してみようかな？でも、具合悪かったりしたら悪いし…。

そんなこんなで悩んでるうちに日付変わっちゃってるし…。

なんともないといいんだけど…

明日も委員会あるし、文化祭の準備も始まるしなあ。

林くんも頑張ってるから、私も、委員会、頑張らなきゃだし～♪

朝は、目覚ましが鳴るから、起きられる。

母親が急かすから、朝食も食べられる。

遅刻すると担任が煩いから、ちゃんと学校に行く。

教室にいたくないから、音楽室に、行く。

何も考えたくないから、教本を開く。

メトロノームをつける。

自分の音に耳を澄ます。

音程はぶれていないか？

音の出だしは？

音の終わりは？

音量は？

小さく、もっと小さく。

でも、ぶれない。

でも、通る音で。

大きく、もっと大きく。

でも、耳障りにはならない。

でも、柔らかい音で。

教本をめくる。

音楽室の片隅で、壁に向かって、ひたすら耳を澄ます。

チャイムが鳴る。

足早に教室に入る。

出席に返事をする。

授業の準備をする。

ノートをとる。

問題を解く。

チャイムが鳴る。

音楽室に行く。

教則本をめくる。

昼にやるページを決める。

チャイムが鳴る。

教室に戻る。

ノートをとる。

問題を解く。

チャイムが鳴る。

音楽室に行く。

弁当を胃に詰め込む。

歯を磨く。

うがいをする。

教本をめくる。

自分の音に耳を澄ます。

音の繋ぎ目は滑らかいか。

きちんと切り替わっているか。

スタッカートは？

アクセントは？

クレッシェンドは？

指は回っているか？

メトロノームからずれていないか？



チャイムが鳴る。

教室に戻る。

授業の準備をする。

ノートをとる。

問題を解く。

チャイムが鳴る。

音楽室に行く。

教則本をめくる。

放課後にやるページを決める。

チャイムが鳴る。

教室に戻る。

ノートをとる。

問題を解く。

チャイムが鳴る。

音楽室に行く。

挨拶をする。

ミーティングの内容を頭に入れる。

基礎練する。

練習曲をさらう。

今はまず、楽譜通りに。

合奏曲をさらう。

これもまず、楽譜通りに。

それから、合奏で言われたことを確認して。

パート練。セクション練。

周りの音に耳を澄ます。

音程が合っているか。

テンポが合っているか。

音の形が合っているか。

先輩の話に耳を澄ます。

どうすれば、言われたことを音で表せる？

全体合奏。

周りの音を聴く。

ほかの楽器のフレーズを聴く。

自分の音を確認する。

指揮者の言うことに耳を傾ける。

しっかり楽譜に書きこむ。

練習が終わる。

楽器を片付ける。

ミーティングの内容を頭に入れる。

音楽室の机を直す。

急いで帰る。

誰にも話しかけられないように。

けれども、挨拶は忘れないように。

家に着く。

夕食を胃に詰め込む。

シャワーを浴びる。

予習をする。

復習をする。

布団に入る。

何も考えずに済むように。

何も思い出さずに済むように。

誰も傷つけずに済むように。

誰にも傷つけられないように。

体育祭まであと一か月♪

日めくりもあと少し。

入退場門もできたし♪

クラスTシャツも注文したし♪

クラスの旗もできたし♪

他の人たちの準備も進んでるみたいで、委員会も楽しいし♪

あとちょっと♪

あとちょっとで、体育祭♪

あとちょっとで、委員会が…終わっちゃう？

あとちょっとで、林くんとは、また、普通の同級生に戻っちゃうの？

それで、いいの？

このまま、終わっちゃっていいの??

…良く、ない。

…そんなの、やだ。

やだ。

絶対に、やだ！

でも、どうするの？

…体育祭が成功したら、林くんはボクを認めてくれる？

…仲間として、でもいい。認めて、くれる？

…認めてくれたら、近くに、いられる？

ううん。それだけじゃ、ダメ。

昔の仲間じゃ、やだ。

そしたら、

そしたら…

…言う？

林くんに、好きですって、言う？

うん。言おう。

だって、仲間じゃ嫌だもん。

ウジウジするのも、嫌だもん！

よし！決めた！

体育祭が成功したら、林くんに告白する！

それで、ダメなら、あきらめて、友達になつてもらおう！

絶対に、体育祭、成功させなきゃ！

盛り上げなきゃ！

楽しまなきゃ♪

「美咲～。美咲？美咲ってば」

いけない、先輩が呼んでる。

ちゃんと、耳を澄ませないと。

「は～い。」

「あ、いたいた♪最近、美咲はホント集中してるよね～。」

「そうですか？」

やばい？人と話したくないの、ばれてる？

「この前来てた、N響の先生も感心してたよ～。あの子、スジいいねって♪」

「ホントですか？」

「うん。…でね。」

「はい？」

「今年のソロコン、うちのパートからは美咲に出てもらおうと思って。」

「えっ？」

「3年は全員一致だったよ。コンクールまでは迷ってたけど、最近の美咲の音は全然違うって。」

「…ありがとう、ございます…。」

「出て、くれる？」

「あ、はい…。先輩たちがそう言ってくださるなら…。」

「よかった♪じゃ、早めに伴奏者探しておいてね。」

「はいつ。」

これで、目標ができた。

曲を決めて、伴奏を頼んで、練習しよう。

基礎練習よりもやりがいがあるだろう。

基礎練習よりも打ちこめるだろう。

…そうやってるうちに、少しは、楽に、なる…だろうか？

毎日、練習をした。

二週間後に、先輩に聴いてもらった。

「うん。ちゃんとさらえてるから、あとは表現だね。美咲らしさを出してね♪」

「ありがとうございます。」

三週間後に、校内予選があった。

…選ばれた。

良かった。また、練習ができる。

良かった。…私にはまだ居場所がある。

齋に選んでもらえなくても。

齋の一番になれなくても。

…まだ、あるのだろうか？

齋の隣には、まだ、私の居場所があるのだろうか？

一番でなくても。

…林くんの、次でも…。

そういえば、最近、齋はどうしているのだろう？

うちのクラスに話をしに来ていた？

部活に来ていた？

…今日の演奏前は？？

私は、何をしていたんだろう？

齋のことを好きだったはずなのに。

齋のことが好きで苦しかったはずなのに。

それなのに、齋のことも見ずに。

齋が話しかけてくれたのに、ちゃんと返事もせずに。

私は、齋のことが大切だったんじゃないのだろうか？

情けない。自分が。

大好きな人を大切にしないで、何をしていたんだろう？

自分を選んでもらえないかもしれない、それだけのことで逃げて。

殻に閉じこもって。

どうしたらいいだろう？

これから、どうしたらいいだろう？